

第72回全日本バレーボール高等学校選手権大会 愛知県決勝大会

2019年11月23日

会場:ドルフィンズアリーナ

■男子決勝

愛知工業大学名電高等学校	3	29	第1セット	31	大同大学大同高等学校	2
		22	第2セット	25		
		25	第3セット	21		
		25	第4セット	23		
		16	第5セット	14		

工藤 (3年)	長谷川 (3年)	先 発 メ ン バ ー	水野 (3年)	高須 (2年)
澤田 (2年)	野々部 (3年)		藤田 (3年)	早川 (3年)
柳田 (3年)	小田 (1年)		坂柳 (3年)	バーナード (3年)
田邊 (2年)	佐々木 (2年)	リベロ	岩田 (3年)	池崎 (1年)

<戦評>

第1シードの愛知工業大学名電高等学校(以下名電)が、3年連続で愛知県の頂点を極めた。しかし、第3シードの大同工業大学大同高等学校(以下大同)に対して第1・2セットを失い、背水の陣からの逆転という、たいへんタフな一戦となった。

第1セットは、名電が21-23からの3連続得点で逆転してセットポイントを握った。しかし、29-28から大同・バーナードの速攻とブロックなどで3連続失点を喫し、再逆転でセットを失った。名電は5回のセットポイントをものにできなかったが、大同は初めてのセットポイントでセット奪取を決めた。

第2セットも大同の勢いは止まらず最大6点のリードを許した名電だったが、中盤に澤田がブロックを3本決めると、17-20から3連続得点を奪って20-20に追いついた。ところが21-21から大同・坂柳の強打と水野のサービスエースによる3連続で失点し、そのままの流れでセットを失った。

窮地に追い込まれた名電は、第3セットのスタメンにミドルブロッカー近藤を投入する。中盤まで相手にリードされながらも小刻みなブレイクで粘った名電だったが、工藤のブロックポイントで追いついた。14-15からの相手の連続ミスと澤田のブロック、長谷川の強打による4連続得点がこのセットのターニングポイントになった。名電は22-21からも3連続得点で一気にセットを奪った。特に24点目、相手の速攻を左手一本でブロックした近藤のプレーがチームに勢いをつけた。

第4セットは互いにリードしたと思ったら逆転され、離されたと思っても追いつくという先が読めない展開になった。両チームとも強打でしのぎを削り気を抜けぬラリーが続いたが、23-23から名電が相手のサーブミスとアタックミスでセットを連取した。

第5セットは互いにメンバーチェンジを多用し、両チームとももてる力を余すところなく発揮した。大同が坂柳の強打で得点すれば、名電もミドルブロッカーの2人が高さのあるプレーで応戦し、最後の最後まで分からない展開となった。デュースまでもつれたこの勝負は、名電が長谷川のバックアタックで二度目のマッチポイントをつかむと、最後は相手のレフトを小田と澤田の2枚ブロックで阻み決着した。

■作成者: 富田 崇

第72回全日本バレーボール高等学校選手権大会 愛知県決勝大会

2019年11月23日

会場:ドルフィンズアリーナ

■女子決勝

岡崎学園高等学校

3	17	第1セット	25	2
	12	第2セット	25	
	25	第3セット	22	
	25	第4セット	15	
	15	第5セット	8	

誠信高等学校

安田 (3年)	石原 (3年)	先 発 メ ン バ ー	北山 (3年)	弓削 (2年)
清岡 (3年)	鷺谷 (1年)		宮島 (3年)	真子 (2年)
石黒 (3年)	鈴木 (2年)		三留 (2年)	岩島 (2年)
福井 (3年)	山田 (2年)	リベロ	渡邊 (3年)	西辻 (1年)

<戦評>

2年連続で同じ顔合わせとなった決勝戦は、第1シードの岡崎学園高等学校(以下岡崎学園)が、2セットダウンの危機的状況から3セットを奪い返すという大逆転で、昨年度の覇者・第2シードの誠信高等学校(以下誠信)に雪辱を果たした。

2セットを失った岡崎学園は、第3セット、この試合初めてスタメンにキャプテン上村を投入した。いきなり3点を失ったが、相手のミスと石原の速攻ですぐに同点に追いつくと、相手のミスで5-4とした。この試合初のリードとなったこの場面から、岡崎学園の逆転劇が始まった。5-5からは清岡の強打とブロック、長身セッター安田のツーアタックとブロックの4連続得点で頭一つ抜け出した。その後三度に渡り同点とされたが逆転までは許さず、最後は石原の速攻が相手ブロックを弾き、岡崎学園がセットを奪い返した。

第4セットは、岡崎学園が清岡・安田のブロックポイントと石原のサービスエースを含む4連続得点で10-5とリードした。中盤は互いに点を取り合ったが、岡崎学園は19-15からの6連続得点でセットを連取した。ここでも鈴木・石黒がブロックポイントを上げるなど、岡崎学園が空中戦を制した形となった。また、第3セットまでは各セット3本以上のサービスエースを許していたが、このセットは1本に抑え、安定感のあるレシーブから思い通りの攻撃を展開できるようになってきた。

最終セットも、岡崎学園は安田・石原が相手のレフト攻撃と速攻を連続でブロックし、スタートダッシュに成功した。すると、ブロックを嫌がるような相手のアタックミスが続き、8-4のリードでチェンジコートとなった。ネット際で優位に立った岡崎学園は、清岡と石黒の攻撃でリードを広げると、12-8から上村・鈴木の強打などで3連続得点を奪い、長い試合に終止符を打った。第4・5セットともに、セットの終盤に連続得点で畳みかけた岡崎学園が、3年ぶりの春高全国大会出場を決めた。

誠信は、効果的なサーブと幅の広い攻撃で、第1・2セットを一度もタイムアウトを取ることなく連取した。ところが、相手を崖っぷちまで追い詰めながら、痛恨の逆転で涙をのんだ。第3セット、5本のサービスエースを奪って主導権を握っていたものの、21-21からの3連続ミスが痛かった。

■作成者: 富田 崇